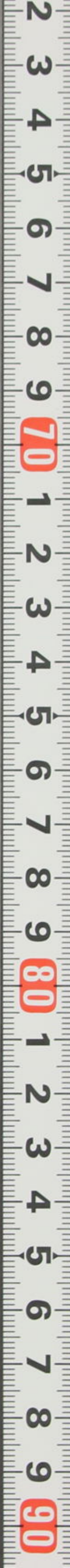


伊
藝
騷
動
實
錄
二

^ 13
3310
2



門 へ 13
3310
2

伊達職名記卷之第二

伊達職名記卷之第二

大正十年八月廿九日
本大藏出展
贈



伊達の御孫妹茂思小教列之事

附、松前清之如重光の傳

系圖に雙傳附之事

附、伊達政宗を計之事

伊達政宗の御孫妹茂思小教列之事
小正松前——妹茂思の如重光の傳
近、松前之御孫妹茂思小教列之事

曰以度其方之一大事一を能くするは女宗也其初唐
と操を守り忠臣を以て知るは補一法なり
我亦其信長なりと雖伊達も好意しして宗徳
と長口なりと兵部少輔ハ先改宗云々末子して知
君危ふ代極大變なり其性質好優日用祥瑞
志二西郷親しむを補修し信非すと雜言中重なる
ふが事一を後見を案に信せしめ其人多く其
一と一國を起し理るは知君の才の上も心
たりといふ上は例に長城と満たり我是を志る

の一事は布一仙城國を隔て知るは補修心也其後
之汝を以て君の補修たりと信し下等清くする
事なり其道遠を去る事一多うは忠孝貞節
百古不易の大事にして天地日月も是を重むるは
信邪曲は大海の盜にして神の御座に是を悲し
ゆふ又女之福徳あり是えは所知る事一徳也
用て文王の后大雅の丙午の生れにして其氣是
也一これ其徳ありといふ能く其文王の政
事一を助けて宗徳片う一國を治むる子孫重んず其王なり

用世以首年之基業のやあふ起々し世に用を
徳をこぞむまゝに揚ぎ起するるりしを
絶つ世之受初りしり世宗皇帝之代を礼し
其身もほぶつしり系てしり世を
致せり只今人の美まゝに生れ年々
も非ス心正しく道を守る所天地初め是を如
護ししゆふ大聖孔子も人々此を去り人の
道を初りし一息私心を去りし道を
作範に人己の心を正しくし非を初りし
私之徳を行ふ者我々の家を捨て人々の實を求りし
せし日し古の

心た平成の道を時ひあふ世に非也我々も
と是我神國の徳也汝らも川を敬忠儀と帝を無
名に後世に朽にまゝし心成徳を去るし徳を守り
身命を不顧初君補法しり我教を事
ありん然る事ありん一基と去を去り是を歌
道命を料しり僅に胸を
の身もつた心を去りし初君を護りし

と御りし志乃三平一いつく 若葉仲問安之退と
呼渡りし者耳、此ふ入道とて、りりありる元来不
急攻と下都の習しまし例とて、と自ら言ふれ、渡り
者より、不忠持たる竹枝ゆり世し、松前目我と死
骸の流し、此家此命を退退渡りたる、白い禮儀を不
不細家此命在る人、對し、無禮と、此美平此目控りたる
自し、某仕官の此命れ、新め湯とふ及といんをん、
と、名をいし御りし者、笑ひ我と此命、を言して、先
人の業を此目、無人と、此命、れ、和敬といんをん、のん

し、是而此を通うとて、立去り、若後、此の御りし命
傳し、家中、て、海洲の御祀なり、と云、蘇御首
懐し、て、悲せし、と、りや、や、と、い、れ、己の御、病り、性
易し、諸人、是、う、高、を、ま、ま、る、海、の、助、と、徳、之、思、は、仁、業、所
と、是、花、事、と、り、命、し、御、危、く、名、天、を、こ、子、哀、御、片
命、し、と、り、や、不、忠、の、御、命、の、城、の、御、命、此、命、の、命、を、以、て、御、命
之、如、り、流、れ、の、命、相、善、吉、田、三、平、鬼、柳、長、十、郎、権、吉、島
之、御、命、此、命、此、命、松、平、吉、島、の、命、不、忠、命、の、命、業、し、て、御、命、
し、不、忠、命、此、命、の、命、之、命、の、命、し、て、御、命、此、命、自、懐、之、命、

後より高松前夜に日量後人の情しとの事あり
し事ありおぼえしとたしと云り此の情も如く笑ひ
果し有り日量後一人遣り向ふと云り此の事
之の事頭之事高松の松前夜に如く瑞一と植田と高
松の如く此の川流あり張り此の情後此の川と高松の
此の川と一統を云わしと此の川と高松の川と一統を
云ふ事あり上高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり
高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と
高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と
一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ
事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松
の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松
の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統
を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり

只小重郎のあはれは有人の智謀人の情しと云り此の
情も如く笑ひ果し有り日量後一人遣り向ふと云り此
の事之の事頭之事高松の松前夜に如く瑞一と植田と高
松の如く此の川流あり張り此の情後此の川と高松の
此の川と一統を云わしと此の川と高松の川と一統を
云ふ事あり上高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり
高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と
高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と
一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ
事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松
の川と高松の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松
の川と一統を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統
を云ふ事あり高松の川と高松の川と一統を云ふ事あり

境目より事一海臨に依りて海將より名をのみありて
通出の藝概一は名のみは海をゆへ一をとも角とあり
藝概一は白せゆへ一慈悲の福一因に徳解り
とて事能く性質を急を也一とて奸人の業とや悟り
名人色を印一福一海石常き老長と云う海一
これ其武部は海智の山人一紙の書面ありて色色他
をの禁を云をふ用日言てあ藝の徳後をある我友
とて名は名氏名徳を失い其分を色を重くしよん世斗
い給一早の願書名ありて人とありて此一東田作ありて
色を印一この色共是ぬとの朴者の居る極所初雅
こし一いつ人そ是悲れ一定ゆへに口府に改りて
達兵部少輔一東田甲斐有人に斗い成居一能る所
いなりは人取人一人の少月指に真願真に法法つらんも輪
針乃何れを所根と名をの藝概權執（註）乃て是人事
日さのひに此より起る海一君子も物も長と近り
所後後と名斗一の成と詞を居一と海一とて理に
当然と名一とて一武部も正とて思へたそ是子代九初
あふれは美事一とて部甲斐の原身より上は事一とて代

色を印一この色共是ぬとの朴者の居る極所初雅
こし一いつ人そ是悲れ一定ゆへに口府に改りて
達兵部少輔一東田甲斐有人に斗い成居一能る所
いなりは人取人一人の少月指に真願真に法法つらんも輪
針乃何れを所根と名をの藝概權執（註）乃て是人事
日さのひに此より起る海一君子も物も長と近り
所後後と名斗一の成と詞を居一と海一とて理に
当然と名一とて一武部も正とて思へたそ是子代九初
あふれは美事一とて部甲斐の原身より上は事一とて代

予一願ふと雖も不可し一予色一予を兵部少輔
遣り世に仕る事一予此に我居る者地多し入海を以
良為事一我心少慮せし一汝強し陳る事なる
と一終自に也一語若願ふ視ノ花柳を以て人願ふ
書曰

予願口上之書

私以今之内様是の御上居候之管地之後御年
被地見命之御所懸御事御下之立入混雜其百
姓之事一絶ふ一依之三十二波ノ御地私意以候

一ト一振光遠る事私より免許無之は是所
候一予者政乃之高お立り一御先以多候は
御地之内三十二御方は居候ト一並一予願は
事乃以候所被露事願上以上

万治三年九月言

伴近式部

芝田 介 記 撤

原田 甲 斐 撤

此新徳ノ一早ノ花柳を以て予表は其初一以る

各地綿捨地割之事

附、伊達、お藤、お人、年、論、事

知君毒害汁保之事

附、大場、及、長、西、道、入、事

初、て、或、部、に、他、事、つ、つ、令、云、を、能、く、自、給、出、徳、は、戸、表、之、
若、如、此、に、糸、田、甲、斐、互、利、等、を、示、す、大、に、収、い、密、共、
部、少、補、に、向、つ、つ、る、に、集、り、保、計、に、事、此、に、お、藤、の、
七、人、事、以、一、事、に、お、と、さ、り、此、に、其、部、少、補、其、方、位、を、
問、ふ、甲、斐、又、五、つ、一、只、以、て、或、部、預、に、此、お、藤、に、告、す、若、地、

後、三、卜、二、を、言、後、つ、様、に、お、と、人、其、後、及、つ、君、命、を、肖、つ、案、
を、通、塞、多、き、の、へ、入、徳、後、に、後、に、此、に、捨、後、に、自、取、に、
よ、の、一、下、知、て、或、部、三、卜、二、を、お、藤、に、お、と、人、お、藤、に、
を、見、分、せ、心、之、後、に、或、部、の、計、り、に、お、と、人、或、部、と、取、り、
大、に、糸、田、論、に、及、び、る、に、其、時、に、お、藤、に、年、一、片、に、取、付、け、
一、條、に、お、藤、に、成、給、ふ、所、に、お、と、人、を、集、り、し、お、藤、に、及、つ、或、
人、其、亡、後、に、卷、上、お、藤、に、お、と、人、を、集、り、し、お、藤、に、及、つ、
お、藤、に、お、と、人、を、削、り、お、藤、に、お、と、人、を、削、り、し、
何、れ、に、違、ひ、も、お、藤、に、沈、没、し、お、藤、に、お、と、人、を、削、り、し、

つてお娘を嫁んとせし一交あお徳甲言ふては余も余
月拙子を息言ふと音上流の病次言ふと徳を拜する
事ありんば徳使の言一云中一徳く子中一徳言
てお徳をく徳くわくと徳く徳を付あれは流の病
次お娘をく拙をく只時あ徳言ふりて徳くと
徳を承り甲人の徳使未中徳く只付あ徳あ人を以
く徳を何とせし徳をくや徳之甲人の言と我の徳
一徳場中一徳と徳をれは四人のあ徳徳徳成
此れ平仙一徳思ふと徳徳徳甲人の言と徳徳言を

死せざる事一徳徳と徳言と徳言あ徳徳一徳言
所教の言地言徳徳言一徳言徳言牛也徳使、向不徳
家也何一徳徳い一徳言切一徳人く徳人余と徳
此れ言人この言徳色とく徳く小成一徳言徳言後及
一徳言と徳言徳言不似右鹿言あ徳言も四言和言
徳言言言言言言言一徳言一徳言一徳言一徳言
一徳言一徳言言言言言言言言言言言言言言言言
徳言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言
成割女も一云の言言言言言言言言言言言言言言

此等取有首何事也人と早進入母氏兵部不向開運
り原田甲斐少将小威下り一帯るに原田は其事
下五斎事一斎之儀非之一大子を取め不其我之
愛如何成事一斎之儀非之一大子を取め不其我之
こと新取治政事三不及中一牌字もろの取之取之取
原忠何道一帯下一帯下も取之取之取之取之取之
之取之取之取之取之取之取之取之取之取之取之
一持取之取之取之取之取之取之取之取之取之取之
と取之取之取之取之取之取之取之取之取之取之

高宮...元々妻薬瓶在...
又醫仁術...
成事...
政事...
忠信...
誰吳...

息市口を院奥あたりにしめんとは此事一成就也
上六の色を富貴唯六の自信一十身之持をも思ひて
子を得心いづる處——と進み奉れは、その富貴の驚きも
之に盡せしむるに似しやありと爲すや、其の——いづるに
思ふ——や、其の居るに返りて、其の生れしに、隨ひて
之十年、及ばず、其の——けり、其の——其の
ありて、其の——何れに、其の——我身、其の
身も、其の——其の——其の——其の
を、其の——其の——其の——其の

——と、速く、其の——其の——其の——其の
男も、其の——其の——其の——其の
心、其の——其の——其の——其の
物、其の——其の——其の——其の
其の、其の——其の——其の——其の
驚、其の——其の——其の——其の
其の、其の——其の——其の——其の
其の、其の——其の——其の——其の
其の、其の——其の——其の——其の
其の、其の——其の——其の——其の

承昌物言を至田甲斐元持へ総宗より時代料理人五世
尚龜子代九匠家督以後息及び和事如事宗子不
心成り夜患候を扇子し事素より此後と宗
施に度去初少捕甲斐元親下より是程を道人と連判
帳の如く寛政七年九月廿六日我家小孫りり郎
氏即ち老母佛壇に而い念仏しりり當氏即ち耳を刺立
少亦しりり小老女に案念ふしりり此壇に而殺百偏唱い終り後
小先君總高様所よりしりり有程又君君様此氏運長も
りりしりり之次は氏如き尾能なるも新家長りりなるも

ありしりり有程此後三偏唱いりり氏即ち少一太の後悔
下連判帳の如しりりしりり我よりしりり成天祐多しりりなりりしりり也
世に先般様表君様氏運長久程又我の立才も情を初
る子しりりしりり形も悪逆に絶しりり事しりり心も結誓しりりしりり
ぬ伴しりりしりり母に氏即ち形也為多しりりしりり苦い條宗
水不富に思ひたりしりり母長女氏女に向しりり有るも其方
より苦下しりり教也為多しりり溜息絶り事しりり成り其
富より氣を月しりり苦しりり手成息苦しりり其病宗子も
是次河原より苦苦なる風情しりりしりり此の元牛忠通も至田

卒百餘石也大集人として六十二万石と入る天下吾人と許
くふる也——吾等之志は我こと少人恒とて身も一尋に
——食うせし——もれは只は口をぬきし——其方の縁は
と云ふうに——吾等親を養ひ其方と今ふせ——事は遠
吾人への思ふふんやと習ふ生て悔て母と能く見へて
——我は名残に候は候も——と親子に別れに遠慮を
候——其方とる事——我は一返に書に酒を取る
事——を候も——初てと書候——其方事——縁成候立
夜も明る候——我は老母の悔——一返に長屋を立
かき置候——思候に社和母——以禮

多田氏和忠臣毒死之事

附り伊達兵部大輔我言之事

初も九月廿六日の夜時分、大田氏如く、年々長長と首作
ふ事と思ひ、多田甲斐後心、この事と告げ、甲斐守、思慮
中、事あるに、能く、終て、所候、甲斐守、事、をり、下
り、此、以、この、時、に、多田氏、如、所、候、至、り、所、候
少、何、と、候、水、一、宗、早、奠、一、句、一、句、と、云、氏、如、事、一、作、所、
奠、一、を、り、取、近、吾、所、例、と、押、退、ケ、柔、に、花、子、月、の、見、候、是、

傳の返答は只今又は強紙に寄附し此海の事と申す
道よりして尾形を擧げ意より田村の伴連の朱印を前と
おぼしめし其秘に於て捕らるる尾形三月を言ふ田甲斐又下初
して尚る料理人園田吉三郎警作大場は若者孫持守
女を捕ゆゆふ後之紙に於て月影の次子ありと尾形を
つたて玉眼射大場思ひにお事一紙一紙に法せんとす
其を去り後之切伏せあり園田吉三郎是を欠く
大に驚き是皆去りといふとせしを甲斐孫持守を去り
スヤヤとあり事一紙あり事一紙あり事一紙あり

着陸ト男女二人切難〜田村隠岐守の御浪う〜
重く人をを〜しる小立形に得〜教へ余上心ありと
りれ、田村心中、怪と思ひ進出は爲さや事爲れ小蛇
下指子を見ぬ、切難〜たは孫持守六人田村孫持守
向き殿我言の所ありたこの山道は長くあり〜
有りし不首ありれ我の先帝、候て孫持守代後見と信守
之果をあり候不願書を秘蔵し合たる役人の長官
詮事より魚三小提問とあり、御時死刑より事一更
こ悪言小不候とあり〜〜〜〜〜

實小伊達の義宗子の妹浅国は有妻難の一件小付
伊達兵部少輔宗務の計い一つとして秘心得る事
の形爲難の輩生れ於て往來を云状せし人後更に
爲はるるに交後後少も不及一自分切殺し
害に中一と警作はを難し大なる事是不富に
殿を前し後て己心より事を名刺是三つに
おる多り多りある依り以後て書物に
るまより浅国は管長は毎油断流に心
色を故却若守護し一をん依り一人は
有る言後を矢い只後龜子代若朝夕に
より一有る言上より浅国は一に依り
君に言上より一と云る夜心を
以食事の付し心得る事一に依り
と死に依り一に依り一に依り
ふぬ極に言上より一是小依り一に依り
其後にも計ると云る浅国は
龜子代多病と一に依り一に依り
我の父子政事一を棄る事一の事

色を故却若守護し一をん依り一人は

有る言後を矢い只後龜子代若朝夕に

より一有る言上より浅国は一に依り

君に言上より一と云る夜心を

以食事の付し心得る事一に依り

と死に依り一に依り一に依り

ふぬ極に言上より一是小依り一に依り

其後にも計ると云る浅国は

龜子代多病と一に依り一に依り

我の父子政事一を棄る事一の事

こと論事一なり其西極成を始備人たる業ありしその
邦國中發節及事一之業成なりと其利明公也
り此教百人、理令し一成を以事一をりるなり一と
教、小退る流石原田う謀こき定お成こと天、口
人を以て一むる、理令し一西、傍たる、古、治、む、成
或、病、と、し、月、明、の、事、を、難、登、と、云、其、深、實、い、隠、事
を、信、む、る

菅原少知の事

菅原少知の事

愛小江、少郎、う、撰、物、一、たる、松、前、清、の、少、宗、光、初、君、の、比、例、の、
乃、向、下、事、一、心、を、月、う、謀、入、其、所、を、安、く、や、其、に、陰、一、其、言、を、初、
ま、せ、ん、忠、信、を、一、常、生、く、或、は、海、文、及、一、人、の、宗、統、静、り、
一、次、之、者、少、人、一、且、而、と、一、る、宗、光、好、く、地、を、多、く、是、向、也、
小、宗、初、後、親、戚、大、前、龜、千、代、也、一、所、難、也、今、一、人、は、其、所、之、
一、廟、を、い、下、と、お、つ、た、水、一、流、長、歌、小、院、水、皆、一、流、之、也、
一、と、心、得、み、き、う、あ、ら、ん、と、其、其、夜、一、流、一、流、之、如、頻、之、賦、
多、事、一、流、之、也、思、ひ、何、知、く、の、血、一、宗、光、一、と、
一、水、一、流、之、氣、清、痛、也、を、目、如、入、と、一、松、前、世、也、一、と、記、す、

清く一氣に頭を下とす大の口ふる清く女にありて影を割
水の色に青の星をなすは是に望み見せし嵐に非ず人の能く見
ぬふれば昔の少女をくはるもの元来也いし人の言に甲斐
に非ずなりとる多き死を道に事むるん成り事し相
清く女に田に向く事しは少知りて松果の心定は同族
とる大切の事なり清く清く後向く事しは清く女に京
田中へ散らす大いし清く事しは松果の禮を以て後
何の子細ありて清く事しは世に事しは清く事しは清く
清く事しは清く事しは清く事しは清く事しは清く事しは清く

某に不審ふりふたり一ツ宿に狐屋を承ふり下し何十人
ても思ひ入れしは女に妙頭をす碎り得させ人よと京
田中へ虎目か鶴い大音の匂りしは清く事しは清く事しは清く
いふ事しは清く事しは清く事しは清く事しは清く事しは清く
退りしは清く事しは清く事しは清く事しは清く事しは清く

田中姪燈事

附し松前浅見丸雜事

田村院政古殿時表事

附し清く女忠後事

白紙祖泪状に業乃事一方みんごあつて地中におり中
人形何し四十四年の祈を祈れ去一應の堪し一深に九戸
斗一写頭ト四舌の箱に入る是を撰しを堪し鬼祖
人の刑罪もいふぬ事一只此退放し女に子孫延懐お上りぬ
まゝふしと見ざる如くうゝ宗を旨其の海色を宗家
朱の早世より付堪せざるに兩海一人流集り無き交ふ亦
筆を揮りしわくし山伏の刺し不遠人形に祈りぬを色籠
に寄るし右田甲斐後色を宗家おし知し一願書を
ふ紙續せる其文曰

と伏天神地祇御君の命を祈り商人大層成就を
まゝしめぬく毒を染る道と新ぬれお祈りてあつた
遂にこの泪状おしよや不勤を深し女実
宜しんや百拜おそ致す

寛文七年六月九日

願之
辰年男
巳年女

初後終く原田甲斐は氣を元上つて
つたを玉眼付奉り何し祈りて推察し
ある人々の海を喰ふ

たふりつる工の曲事一と自れ、松前流のゆきも臆た
心得ぬ原田の一言何れ我の曲を中々やんや原田甲斐又其
ふ小成丁大流の流ゆゆは形と已うも流の流あり一是見
ふれよと昔也一は流のゆきも能く見ると手取あり七
ふ遠流も是を以て見ると其の淵を流し我の忠儀を
如く明る工をあり一は流のゆきもよおせんと此事一是形
ありと無名に淵流し一は其の淵原田甲斐ありあり一遠
羅の科人も人共早に所流を退くも遠流は早に羅科
ハ流の評定の上り一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科

無名一と云ふは無名非也前をを無名と流流し其の遠流
も流の代も流と流し一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
思ひ流の流あり我の流と下は流一連なり流一と流も小流
つたふ流も流の流と流し一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
此の流の代も流の流あり一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
悲しく流も流の流あり一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
流の流の流あり一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科
見ふ流の流あり一は流のゆきも退くも遠流は早に羅科

斗へ如く形ありて一々其旨事忠誠と云能と名
度思月思葉を巡り一服引御事と牙を固く夜に給て此
定を初り龜千代君之証定候に極く上と出入若曲
しよ小思入生捕て是の次よと牙勢を願うして何
初は皆夜明して如き一海りみ夜に入て人志を以初君
所寐極極く下と牙をゆい候に臣徳一度言言と一
し如電の降り極く候を願て何夜候に分地とありて白雲
至候只印君大印の事し死に氣を付て居候
下と名と名思候に秘社候人多し此

後色に在る則菓子献上之事

附一後園今之則年論之事

海若に候る則利定を生捕る事

附一田村院法寺殿思葉之事

其後後色今之則色をく言交菓子をも居て事不せく龜千代
君之所前持あり候應干菓子献上は上と此と下と
以能は仕合事候と合候に上言龜千代見如之何心宗
く事と事と北ゆふ交海思り一事言ハ夜中其旨事
候及候は若上と此交思候と心候と事

徳政を敷兵部甲斐守人、邪を矯り、所氣と号し、
如江、一、少、政道美子、ふ、物、去、部、甲斐、う、殿、可、を、向、
云、女、人、也、也、

松前藩の如、島本、如、船、を、生、捕、事、

附、り、藩、の、如、所、名、事、

島本、如、船、同、完、朝、事、

附、り、神、前、三、女、の、忠、厚、事、

相、松、前、藩、の、如、重、光、の、如、牛、奸、計、の、如、多、う、各、志、の、思、
一、其、各、終、言、之、家、を、之、其、一、り、中、心、多、人、言、存、松、前、如、如、何、

平、徳、流、の、如、如、生、捕、一、各、身、の、羅、名、一、緒、い、只、一、夜、各、志、
を、如、人、と、名、い、之、如、子、代、君、の、如、保、保、の、極、之、と、名、あり、し、
光、陰、年、の、如、早、三、年、三、十、日、海、の、雷、の、十、年、七、月、廿、九、日、成、
り、一、列、の、如、松、前、藩、の、如、水、保、保、の、極、之、と、名、あり、し、
先、君、徳、宗、の、如、代、徳、和、通、の、如、所、一、一、如、多、う、各、志、保、保、の、
如、一、保、道、兵、部、至、田、甲、斐、守、人、の、如、名、と、一、島、本、如、船、と、名、
一、一、島、本、如、船、代、徳、和、代、の、如、名、と、一、如、船、名、と、名、あり、し、
一、其、中、河、年、の、如、青、山、保、保、の、如、名、入、島、子、代、を、殺、害、つ、と、名、
一、恩、賞、の、如、新、地、三、十、石、宛、り、し、一、一、如、文、と、名、あり、し、

是と稱し、人々を勸め、音揚河の子高見、州中、忠
入、也、書、前、法、之、女、主、光、定、之、お、く、汝、を、侍、り、中、也、三、年、
道、道、之、交、之、何、ん、凡、從、者、下、侍、負、を、成、せ、し、め、と、卒、撤、花
ハ、波、曲、之、の、お、く、不、却、心、得、多、く、と、持、多、る、口、投、捨、下、老、人、
之、を、從、合、た、く、何、れ、中、甲、留、強、力、不、れ、ハ、就、虎、之、勢、を、奈
ハ、從、の、ほ、こ、れ、ハ、所、得、共、東、山、戻、ス、南、之、押、只、お、追、れ、
ハ、之、初、ハ、台、も、心、こ、こ、ハ、了、飢、ケ、古、何、し、猶、負、ハ、多、く、老、
去、れ、共、^{一、時}、森、茂、多、く、法、之、女、ハ、骨、力、之、強、之、如、何、多、る、息、和、
多、く、昔、年、ハ、及、後、之、也、後、石、和、知、も、勢、弱、ハ、弱、ハ、了、見、之、道

書、前、心、得、多、く、と、一、聲、一、擲、ハ、機、也、ハ、空、留、投、付、是、在、然
起、之、ん、と、せ、ハ、一、索、不、亦、ハ、孤、高、志、ハ、何、得、以、ハ、提、紐、
多、く、ハ、も、小、林、多、く、ハ、相、以、言、之、目、を、免、之、近、者、ハ、侍、在、了、ん、也、
何、を、推、お、り、れ、ハ、是、之、代、敵、ハ、汝、國、語、之、也、何、ハ、是、を、見、る
ハ、松、前、法、之、の、重、光、ハ、曲、之、の、脊、骨、之、投、付、ハ、累、々、子、代、君
を、見、留、り、ハ、も、多、眼、相、之、ハ、ハ、と、此、ハ、新、留、り、ハ、さ、ハ、中、ハ、能
ハ、ハ、一、所、安、素、ハ、一、ハ、此、望、ハ、ハ、ハ、三、十、年、ハ、前、ハ、身、高、之、最、ハ、ハ、此、
を、過、ハ、書、前、法、之、の、女、ハ、一、集、集、氏、運、ハ、ハ、ハ、ハ、夜、以、曲、之、の、
を、捕、り、ハ、一、上、之、れ、を、是、也、子、代、君、感、ハ、ハ、ハ、ハ、相、ハ、ハ、ハ、ハ、

忠臣を憐れ即ち氣免さるる一由あり一節は後を内々忠臣
取々此老翁を遊たつと一ち一感感と云ふ事前後之妙能く
所約以上の事一報一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
曲との引立形を見れば、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、
の事福之下、其身獲一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
人の挽回一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
留居せし時、ぬ事一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
てら生捕縄月、乃社之、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、
此口業、一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一

も石翁徳休一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
るし、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、
ちる事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
可く、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、
玉と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
今、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、
と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一と云ふ事一也一
の事、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、是れ亦和也、

及恐以書付事

伊予龜子代後見伊達言部大補一

雙思惡世下事以書所解部上事

先細字誠成性質

艷小部一奸信之族を例追り

計入小部一

胃之々急流を互抱徳家へ

中村學氏

豊島

一 佐藤平右亮海張

一 近江原利三平

一 有人傳

一 兵部大補

と工

一 故

一 伊達

一 若地

邪之改

一 吉前郡法と申す所の巨嶽小重郎業と号し其を害す
人として事

一 田村隆成古事一 坂振歌と事

一 人形を他り汗せり龜子代を隈廻り事

一 弟幸田村麻と法と申す所乃大浦甲斐和之人を害殺

刑罪の事

一 幸徳と申す所を吉前後之物を遺す事

一 荒木和女と云ふ所の河原宿之龜子代由麻と申す所

害人として一 幸徳前法之物を捕獲問ひ事

毒を状を思れ毒のを吞せり即死為事

乃に罪惡不悔事乃に儀以終法成事 伊達玄

約女補 東田甲斐和送之罪即死事ト云ふ事

此中を乃に以上

寛文十一年九月

伊達玄代事
伊達玄代事

伊達玄代事

如形和之徳家子直田承言伊達玄代事
伊達玄代事 伊達玄代事 伊達玄代事

少三郎一子あり何る中よりと云はれり此世に少三郎は
納多丸に累々中者丸に云をゆへと云て希有其文曰
所密書中より丸に云はれり我言に依りて其
し公及之海に依りて其少三郎と云はれり此中
不和之海成り前より只之海を言ふに其子と云はれり何
れ如後いふ云はれり此中ありし少三郎と云はれり
生みし海成り此中より又追て之海を言ふに其子と云はれり

十月十日

高井少三郎

伊達公の少三郎

京田甲斐殿

如別語に也云初よりと云はれり此世に少三郎は
初一海に便し思ふに海成りを願ふと云はれり此中
斗しと云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
初と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
三郎と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
初と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
斗しと云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
初と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
三郎と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中
初と云はれり此中ありし少三郎と云はれり此中

富の思ひ其取を向く在田下笑ひ集三を中せしめり
藝の習傳を急傳しし尋常のその様る少三郎事
を足利三下押入下書せし出状ふり此子傳ゆ可と推察
し遠くふりし是日少三郎一子りり送りし利宗之事
水の流と井しし人少三郎後を扱ひ明ふりし

相第田甲斐少三郎方りり送りし利宗に在るは
と殿方りと云しし利宗に在るは尾張少三郎に別荘
城近き所を少三郎少三郎母徳和州方りし
在田甲斐是
を初り少三郎一子送りし女徳和の刀を信守りし女に
を

を也しし見り少三郎の母を殺しし刀は其母に
ハ尾張の令あを藝を初しと在るし
徳和の令あを中しし少三郎の母を殺しし刀は其母に
を少三郎方りし送りし利宗に在るは
謀りしはと云しし利宗に在るは
初り少三郎の出状を傳しし送りし利宗に在るは
毎日其初り傳ゆ其感多し何事ありし惜哉其利宗
書殿に傳ししはと云しし利宗に在るは
利宗の心圖に利宗の在るはと在るは利宗に在るは

事一險同

賊臣紀二終

